



平城京から思う国際化

調査理事 山田敬嗣

数年前から、けいはんな学研都市内に勤務しています。正式名称は、関西文化学術研究都市ですが、通称けいはんな学研都市と呼ばれるのは、京都、大阪、奈良の府県境に広がっているからです。本会に関連する研究機構や研究会社、多数の企業研究所も立地しており、国内外からの研究者や学生も多数活動されており、国際的な学研都市に成長しています。

けいはんな学研都市の中には、平城宮跡も含まれており、今年は、710年に元明天皇が遷都してから1,300年を祝賀する行事が多数企画されています。そのいにしへの都に興味を持ち、週末には、国会図書館関西館や県立図書情報館などに通っては、平城京の資料を読んでいます。シルクロードの東端として、単に文化や物資が流入していただけではなく、大和独自のものとして発展させた工芸品などを輸出していたというのは驚きでした。そればかりか、大陸の多様な国や多様な文化を持った人々が平城京に来て、暮らしていたというのです。鑑真が来日に際して何回も失敗したように、航海術も十分でなかった時代に、国際都市として栄えていたのです。多様な文化や異分野の技術が交じり合うところに、イノベーションが生まれるとともに、新たな文化が育つといわれます。これは、ルネサンスの立役者となったメディチ家が、異分野の融合の受け皿であったことでも知られています。つまり、平城京は、日本のイノベーションの出発点といえるでしょう。

ところで、本会や国内の研究機関の中を見たときに、多様な文化や多様な言語を受け入れる素地は整っているのでしょうか。ヨーロッパの企業研究所を訪問する機会があるのですが、立地国の国籍を持っている研究者・技術者の割合は高々50%と、しばしば聞きます。大半が日本人研究者で構成されている国内研究所の方が、少数派でしょう。高度成長期には、ムーアの法則などが示唆するように、本流となる技術開発のロードマップが共有されていました。その時期には、共通の言語や慣習を持った人々が集まって、技術開発をすることが、効率的に技術優位性を産み出す方法として理にかなっていたでしょう。

しかしながら、21世紀に入って、混迷の時代となった今では、ロードマップ型の研究開発ではなく、イノベーション追求型の研究・開発が必要になってきています。これを推し進め、世界的なリーダーシップを取るためには、旧来の研究・開発体制からの転換が必要なのです。異分野の交流や、異言語・異文化の上での交流は、今までの組織やルールでは効率的には進められません。それでも、イノベーションのリーダーとして本会が役立つためには、あえて挑戦する必要があるのだと思います。

本会では、基礎・境界ソサイエティやヒューマンコミュニケーショングループに代表されるように、異分野交流の仕組みを作ってきています。また、国際化に関しては、東アジアを中心に海外セッションを持っています。現在、8セッション、会員数2,815名です(2009年11月末)。

海外セッションからの英文論文誌への投稿は積極的で、掲載論文の7割弱は海外からの投稿ですが、他の活動では、海外セッションとの交流は十分ではありません。筆者が幹事を担当する国際委員会では、海外セッションとの技術交流や人材交流などを通して、本会の国際化を推し進めています。海外セッションへの情報発信はGlobal Plazaの発行として既に開始していますが、海外セッションと国内会員との情報交流の促進方法も検討中です。この中で、文化的な融合や電子情報通信技術以外との異分野融合なども組み合わせて、本会がイノベーションリーダーとなるように、新たな枠組みを構築していきたいものです。電子情報通信学会らしい国際化については、多くの会員の方々と議論し、本会らしい進め方を模索していくことが大切だと思っています。

毎年、総合大会で海外セッション代表者からの御当地電子情報通信事情に関するセッションを開催しています。当セッションへの参加も積極的にお願います。